

---

# Loose Knot

sadaka

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Loose Knot

### 【NZコード】

N8185M

### 【作者名】

sadaka

### 【あらすじ】

中学生のマイとコウは「近所さん。のほほんとした一人の微妙な関係がちょっとずつ変わっていくかもしれない物語。

## 太陽のたおい（一）

春眠暁を覚えず、といつ言葉がある。これは、春の夜はとても眠り心地がいいので朝が来たことにも気付かず、つい寝過ごしてしまうという意味だ。春は陽気がいい。特に昼食が終わってからの五時間目は睡魔との闘いである。何度も経験したことがあるだけに、頬杖をつきながら黒板に目を向けている倉科マイは国語の教諭が滔々と語っている内容に密かな同意を示していた。

夏は、寝苦しい。朝となく夜となく、とにかく気温が下がらなければなかなか寝付けないものである。今がまさにその状態で、蒸し風呂状態の教室では生徒があちこちで下敷きを団扇代わりにして自分に風を送っていた。昼食が終わった後の五時間目、普段ならクラスの大半が睡魔と闘っている時間帯だが、生徒達の目は眠気ではなく暑さのために半眼になっている。そんな中につれて例に漏れず下敷きで自分を扇いでいたマイは、隣の席で熟睡している小笠原ユウにチラリと視線を傾けた。

春夏秋冬、朝晩。この小笠原ユウという人物はいつでもどこでも眠っている。春は、前述の理由から共感できる。秋は、陽射しが柔らかくて風が涼しいので同感だ。冬は、暖かい布団の中であれば頷ける。だが夏だけは、どうしてこの暑さの中で眠つていられるのか、マイには理解できなかつた。

「ユウ」

授業が終わつても隣人が眠りこけていたため、マイはユウの肩を揺さぶつた。教室には冷房がないのでマイも汗だくではあつたが、ユウの体は寝汗に濡れている。

「ユウ、起きなよ

少し手荒く、マイはユウを左右に揺する。すると鬱陶しいと言わんばかりに、ユウは不機嫌そうに体を起こした。

「なんだよ

「授業、終わったよ」

マイが教えてあげるとユウは寝ぼけた様子で田を泳がせた。教室内の様子を確認したユウはまだ帰りのホームルームがあるというのに、すぐさま鞄に手をかける。マイは呆れながらユウのワイヤーシャツの裾を引っ張つた。

「ユウ、いいかげん起きなよ

「ああ、まだか」

帰りのホームルームが済んでいないことによつやく気が付いたようで、ユウは浮かしかけていた腰を再び落ち着けた。椅子の背もたれに体重を預けたユウはそのまま頭を垂れる。前髪が邪魔でマイからは顔が見えなかつたが、彼はまた瞼を下ろしてしまつたようだつた。マイとユウの関係は友達未満の『ご近所さん』である。小学三年生の時にユウがマイの家の隣の隣に越してきてから一人の微妙な関係は始まつた。以来五年、友達と言つほど話もせず、ただの知り合いと言つほどお互のことを知らないわけでもなく、マイとユウは気楽に付き合いを続けている。

その日の帰り道、マイはたまたま一人で歩いていたところ、たまたま一人で歩いていたユウの後ろ姿を発見した。どうせ向かう先は同じなので、マイはまだこちらに気付いていないユウの背中に向かって声をかけてみる。足を止めたユウは氣怠げに振り返り、マイが追いつくのを待つてから再び歩き出した。

「ユウは夏休み、何するの？」

夏休みを三日後に控えていたのでマイの頭は長期休暇をどう過ごすかということでいっぱいだつた。ユウは話しかけられたので答えているといった調子で重い口を開く。

「寝る」

ユウのこの答えは毎年恒例のものだつた。彼が寝ると言つたら本当に寝るので、今年の夏も特に外出したりはしないのだろう。

「夜、寝られなくならないの？」

夏休みの話も盛り上がらなかつたので、マイは常々疑問に思つて

いたことを切り出してみた。コウは肩にかけていた鞄を面倒そつて

下ろし、息を吐く。

「どうでもいいじゃん」

「……そうだね」

もともと話しあうところつもりで聞いたわけではなかつたので、話の腰を折られるトマイはすぐこ頷いた。わりと、どうでも良かったからだ。コウもどうでもよくなつて、だらだらと述べ。

「じゃあ、また明日」「

適当に話して適度に沈黙を続けているうちに家へ着いたので、マイは軽く手を振つてユウに別れを告げる。あいさつは返つてこなかつたが、ユウは鞄を持っていない方の手をひらひらと振ると、マイの家から一軒先の自宅へと帰つて行つた。

子供同士の仲がいいからといって、その両親同士の仲もいいとは限らない。その逆もまた然りで、マイとコウの関係は微妙だが、双方の両親の仲はきわめて良好だった。

「明日？」

夏休みの初頭、麦茶を汲みにキッチンへと向かつたマイはそこで母親に呼び止められて首を傾げていた。彼女達は明日から、旅行へ行くと言つるのである。前もつて言つておいたはずだと母親は言つたが、マイには寝耳に水の話だった。

「どう行くの？」

「伊豆よ、伊豆。一泊二日で行つてくれるから、あとのことなよろしく

くね

「へ～。行つてらっしゃい」

マイは自炊をするので、両親が家を空けることは苦でも何でもない。むしろ両親が留守ならば大っぴらに友達を呼べるため好都合である。しかしマイの企ては母親の鶴の一聲によつてあえなく霧散することとなつた。

「コウちゃんのお世話もよろしくね」

コウは家の手伝いなど一切しない。そのコウの両親を旅行に誘うため、すでにマイがすべてを引き受ける約束をしているのだといつ。「勝手に決めないでよ」

横暴な母親の振る舞いにマイは憤慨したが、娘の性質を熟知している彼女は財布から一万円札を取り出した。そしてそれを、これみよがしにマイの前に掲げて見せる。

「三日分の食費とコウちゃんのお世話代。余つたらお小遣いにしていいわよ」

鼻つ面に一万円札を吊り下されたマイは馬になつたような気分で「ぐりと喉を鳴らした。コウの分の食事代も込みとはいえ、うまくやりくりすれば五千円以上が手元に残る。

「……わかつた」

十四歳の苦学生にとって五千円は大金である。金欲に負け、マイは熟慮することなく母親に頷いて見せた。

## 太陽のたおい（2）

七月の下旬、マイとコウの両親、その他ご近所の仲良しグループは一泊三日の伊豆旅行へと出発した。当日の昼食からでないとコウの母親に言われていたため、マイは正午の少し前に自宅から一軒先の小笠原家を訪れた。

（そういえば、コウの家にあがるのって初めてだな）

コウの母親から預かった鍵で玄関を開け、マイはコウの部屋があるだろう二階を目指した。一軒家の場合、子供部屋は上階にあることが多い。例に漏れずマイの部屋も二階にあるため、彼女はコウの部屋も二階だつと安易な想像をしていたのだつた。しかし二階に上がつてみても、扉にはプレートらしきものがない。加えてどの扉も閉ざされていたため、マイは仕方なく一部屋ずつノックをしながら覗いて行くことにした。

「……コウ？」

コウの部屋と思しきインテリアの部屋はあつたのだが、そこにもコウの姿はなかつた。けつきよく二階にはいなかつたため、マイはこもつていた夏の熱気を逃がしてから階下へと移動する。ひとまずキッチンに行こうとリビングに足を踏み入れたマイは、そこでコウの姿を発見した。さきほど換気をしてきた二階だけではなく、コウのいる一階も窓は全て閉まつている。にもかかわらず冷房もつけず、コウはリビングのソファーアで眠りこけていた。

（よくこんな中で寝られるなあ）

一階よりはマシだったものの、日陰部分の多い一階も十分に夏の太陽に熱せられてい。息苦しくてたまらなかつたマイはとりあえず窓を開け、それからコウのいるソファーに近付いた。やはりこれだけ暑いと寝苦しいようで、コウは顔を歪めながら眠つている。起こさないと死ぬかもしれないと思ったマイは、とりあえずコウの体を揺さぶつてみることにした。

「コウ、起きなよ」

しばらく呻き声を発し続けた後、コウはゆっくりと目を開けた。泳いでいた視線がマイに固定されると、コウは重そうな頭を抱えながらソファーの上で体を起こす。

「何で、いるんだ？」

「おばさんから聞いてないの？ 食事、つぐりに来たんだけど」

「……ああ……」

コウが眠気を覚ますように頭を振ると汗が四方に飛び散った。しつかり直撃を食らってしまったマイは自分のものではない汗を手の甲で拭いながら呆れた声を出す。

「どんだけ汗かいてんのよ」

「……シャワー、浴びてくん」

のろのろとコウが立ち上がったので、マイは手短に昼食の注文を聞いた。何でもいいとの答えが返ってきたため冷やし中華で済ませることにして、マイはコウの家のキッチンへと向かう。夏場らしく、冷蔵庫には冷やし中華に必要な材料が一通り揃っていた。もしかするとこうなる」と見越して、コウの母親が残していくてくれた物かもしね。気を遣う性質のコウの母親ならそのくらいのことほんやりそうだと思いながら、マイはさっそく調理を開始した。

鍋にたっぷりの水を汲み、まずはそれを火にかける。水が沸騰する間に用意するものは卵焼き・キュウリ・ハムだ。ささっと焼いた卵焼きから粗熱が取れるのを待つ間にキュウリやハムを刻み、少し冷えたら卵焼きも細長く刻む。アッピングが完成して麺を茹てる段階になるとシャワーから戻つて来たコウがキッチンに姿を現した。

「美味そつ」

「すぐできるから、リビングで待つてなよ」

料理は時間との闘いである。麺の固さを調節するのも揚げ物を力ラリと揚げるのも時間勝負だと思っているマイは、鍋から皿を上げないままコウをリビングへと追いやった。マイが真剣であることを見て取ったのか、コウは無言で彼女の言いつけに従う。その後、納

得のいく出来映えで冷やし中華を完成させたマイは、それをリビングへ持つて行くと同時に悲鳴を上げた。

「ちょ、なんて格好してんの…」

「……下は履いてるじゃん」「

「上！ 何でもいいから着てよ！」

上半身裸だったユウは渋々といった面持ちで腰を上げ、リビングから姿を消した。戻って来た時にはTシャツにハーフパンツと見られる格好になっていたため、マイはホッと息を吐く。

「暑いなら冷房入れれば？」

マイが提案してみてもユウは首を振りながら食卓についた。マイもそれほど暑いとは感じなかつたので、それ以上は勧めずにユウの対面に腰を下ろす。食事をとっている間は特に会話もなかつたため、静かな室内には麺をする音のみが響き渡つていた。

夕食は何がいいかとユウに尋ねたところ、またしても「何でもいい」との答えが返ってきた。ので、マイはカレーをつくることにし  
て午後六時過ぎに近所のスーパーへと出掛けた。買物に費やした時間は約三十分。メニューはすでに決まつていたが店内が買い物客で賑わっていたため、レジで予想外の時間を食つてしまつたのだ。小笠原家に辿り着いたのは午後七時になろうという頃だつたのだが、ユウの家はマイが日中に見た時と何も変わつていなかつた。もう夕暮れも終わるというのにリビングの窓は開け放したままになつて、電気もついていない。そしてユウは、相変わらずソファーで眠りこけていた。

(これじゃ泥棒に入られるよ)

明日はもう少し頻繁に様子を見に来なければならない。手間が増えたことを察したマイはため息をつき、小笠原家のキッチンへと移動した。カレーは煮込むのに時間がかかるためユウを起こすことはせず、マイは手元を照らす明かりだけで作業を開始する。

「……まだ？」

「うわっ！」

てっきり寝ているとばかり思っていたユウが突然声をかけてきたので、驚いたマイは包丁を取り落としそうになつた。慌てて握りなおし、マイは一息ついてから顔を上げる。

「おどかさないでよ。起きてるなら電気くら一つければいいじゃん」「カレー？」

「そう。文句ある？」

「好きだから。文句はない」

「じゃあ、あつちで座つて待つてなよ。もう少しかかるから」

マイが邪険にリビングを指差すと、ユウは素直に頷いて戻つて行つた。しかしいつまで経つても電気がつかなかつたので、不審に思つたマイは鍋をかき回しながらリビングを振り返る。

「ユウ？ 電気つけないの？」

返答はなかつた。訝しく思つたマイは火を弱火にし、鍋を気にしながらもリビングへ行つてみる。するとユウは、大人しくソファーに座つていた。しかしその首は垂れ、返事がないところを見ると眠つていいようだ。

「よく、そんなに寝られるよね」

呆れた独白を零してみても、寝入つてゐるユウからは反応が返つてこない。深々とため息を零したマイは鍋を火にかけていることもあり、ユウのことは捨て置いてさつさとキッチンへと戻つて行つた。

## 太陽のこおい（3）

夏は厚手の洗濯物もよく乾く。朝一番で庭に干した洗濯物は畠には乾いてしまい、マイはタ立を気にして早めにとりこみにかかつた。まだ時間帯が早いので直射日光は厳しいが、洗濯物が早く乾くことは気持ちがいい。とりこんだばかりのタオルからは太陽の匂いがしていて、マイは爽快な気分でタオルに埋めていた顔を上げた。

「あれ？ ユウ？」

ふと視線を移した先で珍しい姿を発見したため、マイは縁側で声を上げた。マイが発した声が聞こえたようで、ユウはすぐにこちらを向く。倉科家の垣根越しにユウと向き合つたマイは彼が手にしている小さな包みに目を留めた。

「本屋？」

「そう」

「なんか、ユウが昼間歩いてるところ見るの久しぶり」

「そうか？」

「そうだよ。全然焼けてないし」

マイが指摘するとユウは腕を持ち上げて、半袖から覗いている自分の肌を見下ろした。それから顔を上げ、確かに焼けてないなど言つて笑う。

（あ、ユウが笑った）

隣の席に座つても、腕枕に顔を埋めていることの多いユウが表情の変化を見せるのは稀である。たぶん覚えていないだけなのだろうが、ユウの笑顔を初めて見たような気になつたマイは思わず彼の顔を凝視してしまつた。するとユウは途端に笑みを消し、ぶつきらぼうな口調で「なんだよ」と尋ねてくる。いつものユウに戻つただけだったが、マイは何故か慌ててしまつた。

「そ、そうだ。上がつてきなよ」

話を逸らすような形でマイが誘つてしまつたため、ユウは首を傾

げている。そんなユウの反応に「しまった」と思ったマイはせりへ慌ててしまつた。

「麦茶でも出すから。暑いでしょ？」

「……じゃあ、おじゃまします」

マイは玄関に回つてユウを招き入れようとしたのだが、ユウは垣根の隙間から進入してきた。庭からだと玄関へ回るより早かつたので、そのまま一人は縁側から家中へ入る。一階の自室に戻るなりベランダに布団が垂れ下がつていて気に気が付いたマイは、ユウに適当に腰を落ち着けるよう指示を出してから窓を開けた。夏の日差しをたっぷりと浴びた布団はカラカラに乾いていて、顔を寄せると太陽のにおいがする。今夜は気持ちよく眠れそうだと思いながら、マイは布団をベッドの上へと放つた。

「ちょっと待つて。今持つてくるね」

ユウを部屋に残して階下へと急いでマイはよく冷えた麦茶に氷を放り込み、グラスを二つ持つて自室へと戻つた。

「お待たせ」

よほど喉が渴いていたのか、グラスを受け取るとユウは一気に麦茶を干した。渴きが癒えたことがよっぽど気持ちよかつたのか、ユウはどこか気の抜けた微笑みを浮かべている。これは正真正銘初めて見る表情で、マイはユウの表情の変化にぽかんと口を開けてしまつた。

(うわー、そんな表情もするんだ)

普段の彼が見せる表情といえば八割方が無表情、二割ほどの感情の変化も疲れや不快感を示すものだ。そのユウが、幸福そうに笑っている。

(あれ？ でも……)

ユウのギャップに驚いていたマイはふと、以前にも彼の幸せそうな表情を見たことがあるのを思い出した。あれは確か、春の教室。室内は春の日差しに暖められていて、開かれていた窓からは花の香りを乗せた春風が吹き込んでいた。誰もがアクビを噛み殺して

いた五時間目、コウは腕枕に顔を埋めていて……。

(ああ、なんだ)

何といふことはない。今のコウが見せている表情は、彼が眠りに就いている時と同じものなのだ。

「コウ?」

ふと、コウがとりこんだばかりの布団に熱い視線を注いでいることに気付き、マイは首を傾げた。マイが問いかけている間にベッドに上がりこんだコウは持ち主が見ている前で布団へと倒れこむ。田前で起こった出来事に田を疑つたマイは悲鳴に近い声を上げた。

「な、何してんの!-?」

「太陽の匂いがする」

田をとろけさせながら面白のような返事を寄越したコウは、そのまま瞼を下ろしてしまった。すぐにベッドから規則正しい寝息が聞こえてきて、どうじうする暇もなかつたマイは絶句する。しかしコウの気持ち良さをうな寝顔を見ているつづり、細かなことばづりでもよくなつてきててしまった。

(そんな幸せそうな顔見せられたら起せないじゃない)

一番風呂に入り損なつたような悔しさはあるものの、そんなことはコウの幸せに比べれば些細なことである。コウの無防備な寝顔にはそう思わせてしまつほどの幸せが満ちていて、気の済むまで寝かせておくことにしたマイは静かに田室を後にした。

コウがマイの部屋で眠つてしまつたので、最後の夕食は倉科家でとることになった。食事を終えてもコウが帰るとも言ひ出さなかつたので、夕食後は一人して縁側に移動する。まだ気温が下がりきつ

ていないので夜風も生ぬるかつたが、団扇があれば凌げない暑さではない。団扇を扇ぐ力で逆に体を熱くさせてしまわないよう調節しながら、マイは何となく口火を切つた。

「ねえ、コウ

「何?」

「コウひてさ、寝るのが好きなの?」

「どうでもいいじゃん

「どうでもよくないよ」

マイがきっぱりと言い放つとコウは訝しげに顔を傾けてきた。彼の顔が若干困惑しているように見えるのは、マイがいつもと違う反応をしたせいだらう。しかしマイはコウからの返事を待っていたので、言葉を重ねることまじなかつた。コウはじぱじぱく考へていていうに沈黙していたが、やがて口を開く。

「何で?」

「聞きたいか?」

「……だから、何で?」

「興味。コウがどんなこと考へてるのか知りたいの」

「興味、ねえ……」

「コウの寝顔、幸せそうだった。だから好きなのかなって思つたの」「うん、幸せ」

「あ、やつぱり? でもさ、暑くて苦しそうな顔して寝てる時もあるじゃない? それでもやっぱり幸せなの?」

「……何でそんなに見てるんだよ」

思いがけずマイに觀察されたことを知つて、コウは呆れたようだつた。コウが言葉を途切れさせて夜空を仰いだので、マイも自家の縁側から見える狭い空を見上げる。

「洗濯物とりこんでるとき」

「え? 洗濯物?」

コウが唐突に喋り出したので真意が掴めず、マイはキヨトンとして彼に目を向けた。コウはほんやりと空を眺めたまま話を続ける。

「マイ、幸せそうな顔してた」

「あー、うん。カラッと乾いて気持ちいいよね」

「夏の昼寝も、そんな感じ」

「……もうちょっと説明してほしいな」

「太陽がまぶしくて、緑がキラキラしてると幸せだろ？ 暑いけど、ときどき冷たい風が吹くと気持ちいいし、思いつき汗かいてからシャワー浴びるのも、気持ちいい」

「あ、それなら分かる。気持ちいいと幸せだよね？」

マイが同意を示すとユウは口をつぐんで頷いた。下手くそな説明ではあったものの、ユウが初めて胸の内を明かしてくれたことを嬉しく思ったマイは口元をほころばせる。素直な気持ちは自然と言葉になり、マイの口から零れ落ちた。

「私、ユウのことけつこう好きかも」

「……は？」

唐突でストレートな好意の言葉を投げかけられたユウは驚いたように戸を瞠っている。そんなユウの反応が愛らしくておかしくて、マイは声を上げて笑った。

## 太陽のこおり（4）

夏の夜は寝苦しいので、マイは夏になると冷房をタイマーにかけて寝ていた。しかし夕食後にユウから話を聞いた夜、マイは今季初めて、冷房を消して眠りに就いてみた。日中の太陽を存分に浴びたフカフカの布団に転がり、翌日の晴天を思い浮かべながら眠りにつく。それはマイにとって初めての、とても幸せな体験だった。

（あ～、これはハマるわ）

寝汗をびっしょりとかいたため、朝一番で冷たいシャワーを浴びたマイはよく冷えた麦茶を片手に縁側に座り込んでいた。午前中の風はまだ幾分涼しくて、自然乾燥させている髪を撫でるように乾かしていく。この髪が乾く頃には掃除やら洗濯やらで再び汗に濡れそうだが、その時はまたシャワーを浴びればいいのだ。そう思えば、じりじりと強さを増している夏の日差しすら心地好く思えた。

（ユウ、まだ寝てるかな？）

今日の午後には伊豆旅行に出掛けている両家の両親が揃つて帰宅する。そうなれば次にユウの寝顔を拝めるのは長期休暇明けだ。その前にもう一度だけユウの寝顔を見ておこうと、マイはこっそり家を抜け出した。隣の隣へ行くだけなので着替えもせず、タオルも頭に巻いたまま小笠原家に進入する。二階の私室が空だったのでリビングを覗いてみると、しかしユウはすでに起き出していた。

「……どんなカツコ？」

よれよれのTシャツにハーフパンツという、完全に部屋着スタイルのマイを見てユウは呆れ顔でツッコミを入れてきた。頭に巻いたタオルだけ回収しながら、マイは小さく舌打ちをする。

「起きてるし」

「何が？」

ユウが怪訝そうに問いかけてきたがマイは答えず、小笠原家のリビングでソファーに腰を落ち着けた。マイがすぐ隣に座つたことで、

コウは警戒するよつに少し身を引く。しかしまいはコウの後退を許さず、彼の腕を取るとニヤリと笑いながら顔を近づけた。

「コウ、眠くない？」

「……眠くない」

「無理しないで、寝ていいよ」

「やめろよ」

「いいから。寝なさい」

コウの腕を引いて強引にソファーに横たわらせたものの、本当に眠くないのか彼は目を閉じない。迷惑そうな目はしつかりとマイの姿を捉えたままで、コウの顔を覗き込んでいたマイは首を傾げた。

「あれ？ ホントに眠くないの？」

「だから……」

起きたばかりなのだと、コウは至極迷惑そうな口調で明かした。それでも諦めのつかなかつたマイは、コウの視界を強引に奪つ。

「大丈夫、コウなら起きたばっかでも寝れるよ」

「何がしたいんだよ」

「いいからいいから。目、閉じて」

「冗談で子守唄を歌つていると、そのうつむこコウから反応が返つてこなくなつた。コウの視界を奪つていた手を退けてみると、彼はいつの間にか瞼を下ろしている。しかも目を閉じているコウからは、微かに規則正しい寝息が聞こえてきていた。

（ホントに寝ちゃつたよ）

まさか本当に眠つてしまつとは思つていなかつたため、マイはコウの寝つきの良さに呆れてしまつた。しかし本来の目的は達成することができたため、ソファーの下に移動したマイは存分にコウの寝顔を堪能する。

（かわいい）

コウの幸せそうな寝顔を見ていたら自分も眠くなつてしまい、マイはちよづじい高さのソファーを土台にして腕枕に顔を埋めた。窓が全開になつていてる小笠原家のリビングは風通しがよく、吹き抜

ける夏の風が少し汗ばんだ体に心地好い。本気で寝入ってしまったマイとユウはその後、帰宅したユウの両親に発見されるまで目を覚ますことはなかった。

## クリスマスのあと(一)

寒さが身に染みる十一月、マフラーで顔を埋めながら帰路を辿っていた倉科マイは進行方向に見知った者の後ろ姿を発見した。茶色のダッフルコートをしっかりと着込み、さらにはマフラーで首元をぐるぐる巻きにしているのは小笠原コウといつ少年だ。コウはマイの家の隣の隣に住んでこる『ご近所さん』で、現在はクラスメートでもある。家まであと一分といつ距離ではあったが、マイはコウに駆け寄つて声をかけた。

「コウ」

マイが軽く背中を叩くとコウはようけながら顔を傾けてきた。振り向いた彼の顔が眠そうに見えるのは、冬に限らず一年中のことだ。現在中学一年生のマイとコウは家が近所というだけでなく、同じクラスで隣の席に座っている。しかし少し前まで、彼らの関係は友達未満の『い近所さん』だった。彼らの付き合いの距離は知り合つてから五年という歳月に見合わず、徒歩一分足らずという両家の間よりも開いていたのである。だが今年の夏に、マイはコウのことをちょっと好きになつた。それ以来、マイはコウの姿を見つけるととりあえず構つみになつていた。

「痛い」

コウは叩かれた背中に手を回しながらマイに文句を言った。おそらくは痛みを感じている部分をさすろうとしているのだろうがコウは体が硬く、また厚着をしているので背中に手を回す姿には無理が見える。不恰好なコウを笑い飛ばしたマイは、そのまま彼の文句もさらりと聞き流した。

「寒いねえ。何かあつたかいもの食べたい」

マイが世間話をしながら歩き出すと、コウも渋々といつた風に従つた。合流したのがすでにお互の家が見えている地点だったが、二人は並んで歩く。

「そりいえばユウ、クリスマスパーティー行く？」

十一月二十四日が終業式であり、マイ達のクラスはその翌日にクリスマスパーティーをやる予定になっていた。とは言つてもどこかの店を借りて盛大にやるのではなく、いつものように教室に集まつて慎ましやかに騒ぐだけだ。マイは当日、調理担当として参加することが決まつていた。しかしユウは、にべもなく即答する。

「行かない。寝る」

ユウは睡眠を至福とする類の人間である。この答えも予想の範疇であり、マイは苦笑いを浮かべた。ここで話を終わらせて良かつたのだが、まだ少し家まで距離があつたので、マイはクリスマスの話を続ける。

「調理部のみんなとケーキつくるんだよ。でかいやつ」

自宅のオープンでは無理だが、担任が家庭科教室の使用許可を取ってくれたため、マイは調理部に所属する数人のクラスメートと大きなケーキを作ることになつていった。料理が好きなマイはそれだけでもうワクワクして、ユウの反応など一の次に話をしていたのだが、それまで無反応だったユウがふと反応を示したので首を傾げる。

「もしかしてユウ、甘いもの好きなの？」

「好き」

「そりなんだ？ ジャア、おいでよ。一緒にパーティー行こう？」

「余つたら持ってきて」

ケーキは食べたいが睡眠時間は削られたくない。言外にそう明言したユウは家に辿り着くと、さっさと姿を消してしまつ。ユウが返事も待たずになくなつてしまつたため、マイも呆れながら自宅の門扉をくぐつたのだった。

十一月十五日、クリスマス。夕方から始まるパーティーの準備のため、マイは数人のクラスメートと共に昼過ぎから家庭科教室で奮闘していた。マイは調理部には所属していないが普段から炊事をしているため、料理はお手の物である。そのため、何かイベント事がある時にはこうして駆り出されるのだった。

「けつきよく、何人来るの？」

「先生入れて三十六だつたかな？ ほぼ全員だね」

マイの問いに答えたのは小学生の時からの友人である北沢朝香だつた。調理部に所属している彼女は手際よく作業を進めながら話に応じてくる。マイもまた計量を続けながら考えを巡らせていた。マイ達のクラスは生徒総数が三十六名である。担任教師を入れてクラスの人数ということは、どうやら参加しないのはユウだけのようだ。

「小笠原君って謎だよね」

卵白を泡立てる力チャカチャという音に紛れ、朝香の零した咳き声が聞こえてきた。どうやら彼女も、ただ一人クラスの行事に参加しない者のことを考えていたようだ。ユウの本質を何となく知っているマイは謎というほど大したものでもないと思い、朝香の咳きに対して苦笑いを浮かべた。

「ケーキ食べたいって言つてたから、もしかしたら来る……かも」

ユウの弁解をしつつも、マイは半ば以上来ないだろうと確信していた。何故ならユウには協調性というものがなく、彼にとつては他人との交流よりも惰眠を貪ることが大切だからだ。

「甘いもの好きなんだ？ なんか、意外」

卵白を泡立て終えた朝香は手を止めてマイを見た。フルーツを刻む作業に取り掛かっていたマイはいつたん手を止め、すでに卵黄を泡立ててあるボウルを朝香に渡す。阿吽の呼吸で進むマイと朝香の

ケーキ作りは非常に順調で、他の料理に取り掛かっているチームも着々と準備を整えているようだった。

生地が焼きに入ると、朝香は生クリームを取り出した。ボウルを渡されたので、マイは生クリームの泡立てを始める。バトンタッチしてフルーツを切る作業に移った朝香は包丁を動かしながら話を続けた。

「マイってさ、いつも小笠原君と何話すの？」

「んー、別に。ふつうに話してるだけだよ？」

「その普通っていうのが謎だよね」

「そうかな？　あんまり自分から喋るタイプじゃないけど話しかけて無視されることはないし。ふつうだよ」

生クリームの方に神経を使っていたマイは半ば上の空で朝香との会話をしていた。そのうちに朝香も作業に集中したらしく、一人の間には沈黙が流れる。そういうしているうちに時間は着々と過ぎ去っていて、初めは和やかなムードに包まれていた家庭科教室も夕闇が迫る頃には戦場へと姿を変えていた。

## クリスマスのあと（2）

特にハッピーニングもなくクリスマスパーティーを終えたマイは、家に帰るとすぐ料理疲れで眠ってしまった。すでに休みに入っているということもあり、昼過ぎに目を覚ましたマイがユウとの約束を思い出したのは十一月二十六日の夜になつてからのことだった。

（ああ、忘れてた）

クリスマスパーティーでの食事は好評で、ケーキを含めて全てがなくなつた。余りは出なかつたのだがユウとの約束を果たしたかつたので、一からケーキを作ることにしたマイは慌てて階下へ行き、冷蔵庫を開ける。しかし冷蔵庫にあつたのは卵くらいで、生クリーミやフルーツの類は何も置いていなかつた。

「おかーさん」

すでに夕食も済んでいるような時間帯だつたため、母親はリビングでテレビを見ていた。振り向いた母親の傍へ寄つたマイは急いで言葉を次ぐ。

「卵使つていい？ それと、お金けよつだい」

「何に使うのよ？」

娘からの唐突な申し出に、母親はひどく胡散臭そうな表情になつた。しかしマイが手短に事情を説明すると、彼女は急にしたり顔になる。

「いいわよ。じゃあ、卵も買ってきて」

母親から三千円を渡されたマイは気味が悪く思いながら首を捻つた。

「何で笑つてるの？」

「いいから、気をつけ行つてくるのよ」

母親に軽くあしらわれたマイは疑問を残しながらもリビングを後にして、スーパーが閉まるまで三十分という時間だったので、マイはコートを着込んで慌しく家を出る。閉店間際に買い物を済ませた

マイはホッとして、少しのんびりとした歩調で冬の家路を辿った。

(寒いなあ。お風呂入りたい)

急ぎすぎたせいで行きにかいした汗はすでに冷えていて、吐き出す息は白く空に上っていく。こんな寒さでは、コウはもう布団にくるまっているだろ? どうせ届けるのは明日なので、風呂で体を温めてからケーキ作りを開始しようと思つたマイは手袋を忘れたむき出しの手に息を吹きかけた。

(あれ?)

住宅街の角を曲がったところをふと、マイは同じ方向に向かつている人影に目を留めた。茶色のダッフルコートを着込んだ背中は、知つている人物のような気がする。歩調を速めたマイは追い抜きざまにさりげなくダッフルコートの人物の顔を確認し、足を止めた。

「やっぱり。コウじやん」

「マイ? こんな時間に何してんの?」

突然声をかけられたことで驚いた様子を見せたコウは足を止めると、まじまじとマイを見た。マイはスーパーの袋を持ち上げて買い出しだることを示し、逆に問いつ。

「コウこそ何してんの?」

マイに問われたコウは無言で小脇に抱えていた物を差し出した。本屋の包装を見たマイは納得して頷く。その後、二人はどうやらからともなく歩き出した。

「何買ったの?」

コウに問われたマイは決まりが悪くて、すぐには口を開けなかつた。そんなマイの態度が不可解に映つたようで、コウは首を傾げる。「言いたくないならいいよ」

マイの沈黙をどう受け取つたのかは分からぬが、コウは配慮を示してくれた。しかしマイは、コウに対してもう一度、口を開いたくなかったし気を遣われたくもなかつた。なので、マイは正直に買物の内容を白状する。

「ケーキの材料」

「ふうん？」

「コウとの約束、すっかり忘れてたから」

買い物の意図をそこまで明かすと、コウは眉根を寄せて足を止めてしまった。つられて立ち止まつたマイはコウの突然の行動を不可解に思いながら振り返る。

「何？ どうしたの？」

「それって、もしかして俺がケーキ持ってきてって言つたから？」

「うん。余らなかつたから作ろうかと思つて」

もともと料理をするのは好きなのでマイ自身は手間とも思つていなかつたのだが、それを聞いたコウは深々とため息をつく。本を小脇に抱えなおしたコウはその後、マイに向かつて空いている方の手を差し出してきた。

「荷物」

「うん？」

「持つから。かして」

「え、何で？」

「悪いから」

マイが煮え切らないでいるとコウは強引にスーパーの袋を取り上げた。中に卵が入つているので、マイは焦つてコウにその旨を告げる。するとコウは少しばつが悪そうな表情を見せたが、すぐに真顔に戻つて頷いた。スーパーの袋を手にした後、コウは黙々と歩を進めていく。その横顔が怒つているように感じられて、マイは恐る恐る口火を切つた。

「余計なことだつた？」

ひとたび口にしてしまつと、クリスマスを過ぎたケーキが急に押し付けがましいもののように思えてきた。コウと顔を合わせるのが気まずく感じられたため、マイは問いかけておきながら目を伏せる。しかしユウから返ってきたのはいつもの、淡白な短い返答だった。

「食べたいから。作つて」

「あ、そ、そう？」

「うん。マイの料理は、美味しい」

ユウがマイの料理の腕を知っているのは、夏休みにマイの両親とユウの両親が揃って旅行へ行ってしまったことがあったからだつた。その時、マイがユウの分の食事も作ったのである。ストレートに料理の腕を褒められたマイは嬉しくなつてしまい、気の抜けた笑みを浮かべた。マイのへらつとした表情を一瞥したユウは照れたようにそっぽを向きながら言葉を重ねる。

「俺、一回ケーキのホール食いしてみたかったから」

嬉しいと、ユウは口の中で呟いた。もじもじとした小声ではあつたものの、ユウの発言を言葉として聞き取ったマイは小さく吹き出す。

「うん。明日、持つて行くよ」

ユウに触れたい衝動に駆られたマイはダッフルコートの背中を叩いてから歩き出した。少し前のめりになつたユウは顔をしかめていたが、そのうちにスーパーの袋を持ち直して歩き出す。十二月の凍てつく夜空には月が浮かんでいて、一人の帰り道を街灯よりも明るく照らしていた。

## バレンタインの奇跡？（1）

一月十三日は恋人たちの一大イベント、バレンタインデーの前日である。その日の授業が終わつた放課後、倉科マイはいつもより賑わつている家庭科教室に顔を覗かせた。放課後の家庭科教室では調理部が部活動を行つてゐるのだが、マイは部員ではない。しかしながらマイはお菓子を含めて料理が得意なので、イベントの前になるべく調理部から助つ人を頼まれることがしばしばあつた。

家庭科教室内にはすでに、チョコレートの甘い匂いが漂つてゐる。室内の人口密度がいつもより高いのは、これから調理部がチョコレートケーキの作り方を実演するため、その見学に女子生徒が集まつてゐるからだつた。マイは助つ人を頼んできた友人を探すために、人の輪の中に進入していく。三角巾にエプロン姿で調理台の前に立つていた北沢朝香がマイの姿を認めて声を上げた。

「あ、マイ

「何手伝う？」

時間ががないことを心得ていたマイは、朝香と合流するなり本題を口にする。朝香が部長の方をよろしくと言つたので、マイは調理部の部長である貴美子の姿を探した。中央の人だから離れた隅の方に田当ての姿を見つけたので、マイはそちらへと移動する。

「キミちゃん、来たよ～」

「あ、マイちゃん。いつもごめんね」

マイの姿を認めるとき貴美子はすまなさそうに言つた。マイは笑いながら首を振り、さつそく準備にとりかかる。助つ人扱いのマイは材料費を払わずに余つたチョコレートをもらえるので、実はかなりお徳なのだ。

「気にしないで。お菓子作るのって楽しいし」

三角巾とエプロンを手早く身につけたマイが手を洗いながら言つと貴美子はほんわかとした笑みを浮かべた。三年生はとつくる昔に

引退しているので、部長の貴美子もマイと同じく中学一年生だ。貴美子とマイは同じクラスになつたことはなかつたが、共通の友人である朝香を通して親しくなつたのだった。

貴美子からどんなチョコレート菓子を作るのか簡単な説明を受けながら、マイはボウルや計量スプーンなどの器具を取り出した。家庭科教室の中央ではチョコレートケーキを、貴美子やマイがいる隅の方ではケーキ作りに失敗してしまつた人のために簡単な菓子を作るのでした。チョコレートケーキが難しいことを知つていてマイは調理部つて親切だなあと呟いた。

「キミちゃんは誰かにあげるの？」

お菓子作りに失敗しないコツはボウルをきれいにしておくことだと思つているマイは念入りにボウルの状態をチェックしながら貴美子に話しかけた。すでにチョコレートを刻み出している貴美子は手を止めないで話に応じる。

「うーん、どうしようかなつて思つてるところ？」

「え！？ キミちゃんつて好きな人いたの！？」

「マイちゃん、声、大きいよ」

貴美子が困つたような表情を向けてきたので、マイは慌てて口を塞いだ。だが賑わっている家庭科教室の中ではマイの驚きも大したボリュームではなかつたらしく、特に注目を集めたりはしていない。周囲を確かめたマイはホッとして、改めて貴美子に話しかけた。

「思つてるだけじゃダメだつて。あげちゃいなよ」

「うーん……そうだよねえ。でも、あんまり話したこともないから渡しづらくなつて。それに、今年はバレンタインが休みでしょ？」

今年のバレンタインデーは土曜日なのである。恋人同士で渡す分には問題ないが、片思いの相手に渡そうとするときに『学校がない』というのは痛手だ。貴美子の言つていることがもつともだったので、マイは難しい表情をした。

「確かに、渡しづらいね」

「でしょう？だから、たぶん渡せないかな。朝香は家まで行つて

渡すつて言つてたけど

「えつ！？ ホントに！？」

マイが再び声を張り上げたので貴美子は慌てて口元に人差し指を立てた。貴美子の仕種を見たマイは口元を手で覆い、ケーキの実演をしている朝香を振り返る。しかし人だかりが見えるばかりだったので、マイは安堵して貴美子を顧みた。貴美子は複雑な表情をしたまま小声で話を再開させる。

「来年の今頃は受験があるでしょ？だから今年が勝負なんだって」「そつかあ、受験かあ……」

あまり考えたくない単語が飛び出したのでマイは曖昧に苦笑する。受験は誰にとつても重たい出来事なので、貴美子も早々と話題を変えた。

「マイちゃんは？ 誰かにあげないの？」

受験は他人事ではなかつたが、マイにとつてバレンタインデーは他人事である。だが不意に、甘党のクラスメートの顔が浮かんだので、マイはその人物の名前を口にしてみた。

「ユウにでもあげようかな」

「小笠原くん？ 甘いもの好きなんだ？」

貴美子が意外そうに言つるのでマイは何の気なしに頷いた。小笠原ユウはマイの家の隣の隣に住む、いわゆる『ご近所さん』である。惰眠を貪ることが趣味のユウは強制参加でもなければ行事などにもまったく参加しないので、周囲からは謎の人と見られていた。クラスメートでさえそういう認識なので、接点のない貴美子などには未知の存在もいいところだろう。

「マイちゃんつて小笠原くんのこと好きだったの？」

貴美子が意外さを引きずつたまま問い合わせてきたのでマイは小さく首をひねつた。

「そう見える？」

「見えないかも」

考える様子もなく即答した貴美子がまな板を渡してきたので、マイ

イは笑いながら刻んだチョコレートを受け取った。

「ガナツシユ、作っちゃうね」

貴美子がテンパリングを始めたのでマイも話を打ち切つて小鍋を火にかけた。生クリームと刻んだチョコレートが入った小鍋からはすぐに甘い香りが立ち上る。チョコレートの溶け具合を見ながら、マイはペパーミントのリキュールに手を伸ばした。

バレンタインデーの前日に行われた調理部の実演会は盛況のうちに幕を下ろした。後片付けは手伝わなくていいと言わされたので家庭科教室を後にしたマイは一人、薄暗い校舎を歩いている。しかしちつたくの無人というわけではなく、他の部活動が終わる時間帯と重なったため、夕暮れの校舎内にはまだちらほらと生徒の姿が見られた。

渡り廊下から昇降口に向かっていたマイは、進行方向に知人の姿を見つけたので足を止めた。相手もマイに気が付き、目が合う。お互いに何となく歩み寄りながら、マイはジャージー姿の男子生徒に声をかけた。

「久しぶり」

マイが話しかけた人物は、一年生の時に同じクラスだつた久本といふ少年である。昔のクラスメートというだけで友達と言うほど親しくはないが、顔を合わせれば話くらいはするという間柄だ。しかし一年生に進級してからは、話をするどころか久本を見かける機会さえ激減してしまった。その理由は同じ学年ではあっても、マイと久本のクラスでは教室がある校舎自体が違うからだ。

「部活？ 入つてたつけ？」

久本が怪訝そうな顔をしたので帰宅部のマイはこの時間まで学校に残っていた理由を簡単に説明した。話ついでに、マイは手にしていたチョコレートを久本に差し出す。

「食べる？ 余りものだけだ」

「お、サンキュー」

部活動が終わってばかりの久本は空腹だつたようで、マイが渡したチョコレートをさっそく口に放り込んだ。だがチョコレートという食べ物は水分のない状態で幾つも食べられるものではなく、久本はすぐに手を引く。『もういい』といつ合図を受け取ったマイは残りのチョコレートを鞄にしまった。

「チョコ、もうもらつた？ サッカー部つてモテるでしょ？」

サッカー部や野球部、バスケットボール部などのメジャーな運動部に所属している男子は女子の間で人気が高い。しかしサッカー部に所属している久本は、マイの発言に呆れた顔をしてみせた。

「サッカー部全員がモテるなんて思つてんの？ 単純だな」

「じゃあ、もらつてないの？」

「いや、もらつたけど」

「なんだ、やつぱりもらつてるんじやん」

「マネージャーから部員全員について、義理チョコをな

「……本命チョコは明日渡すもんなんだよ、たぶん」

久本ならもつともらつてていると思つていたマイは氣まずさから微妙なフオローをした。マイの顔にはあからさまに『しまつた』と書いてあつたので久本は声を上げて笑う。ひとしきり笑つた後、久本は忘れ物を取りに行く途中だったことを明かした。

「チョコ、ありがとな。もらつたからにはホワイトデーに何か返す

よ

「えつ、ホントに？ くれんの？」

「チョコレート一個分のお返しだけどな」

「うわあ、逆に期待できそう。楽しみにしてるね」

久本は意味深長にニヤリと笑い、軽い足取りで去つて行く。一ヶ

月先に楽しみができたマイは弾んだ足取りで帰路を辿った。

## バレンタインの奇跡？（2）

一月十四日、土曜日。恋人たちの一大イベント、バレンタインデーである。この日、マイの友人である朝香は長年片思いをしてきた相手にチョココレートを渡しに行つて玉砕した。そのため、マイのバレンタインデーは傷心の朝香を慰めることで終わつた。

一月十五日、日曜日。バレンタインデーの前日に作ったチョコレートを持って、マイは自宅から一軒先の家を訪問した。来客の対応に姿を現したのはコウの母親であり、彼女は玄関先に佇むマイの姿を見つけると柔らかな笑みを浮かべる。マイは軽く頭を下げ、あいさつをした。

「コウ、起きます？」

マイが問うとコウの母親は首を傾げるついでに一階を仰いだ。

「どうかしら。約束でもしてた？」

「約束はしてないです。じゃあこれ、コウに渡してもらえますか？」ラッピングされた小袋を受け取ったコウの母親が不思議そうにしていたので、マイは簡単に事情を説明した。コウの母親は納得したように頷くと受け取ったばかりの小袋をマイに差し出す。

「マイちゃんから渡してあげて。さあ、どうぞ」

コウの母親が満面の笑みで家中へと誘うので、マイはチョコレートの小袋を抱えて従つた。コウの母親はそのまま一階に残り、マイだけが一階へ続く階段を上る。コウの部屋をノックしても反応がなかつたので、マイは少しだけ扉を開いて声をかけた。

「コウ？」

声をかけても、やはり反応はない。マイが室内に進入すると案の定、ベッドには丸い膨らみがあった。すでに毎を過ぎていたのでマイは呆れながらベッドに寄る。

「コウ、起きなよ」

マイが搖さぶると丸い物体は呻き声を発した。寝顔すら覗いてい

なかつたのでマイは少し掛け布団をずらす。すると、コウの寝乱れた髪が出現した。しかし外気に触れた顔が寒かつたようで、コウは再び布団を引き上げる。意識があるのかないのかは分からなかつたが、コウが起きることを拒んでいたのでマイはため息をついて手を引いた。

(無理に起こさなくとも、置いてけばいいか)

早々に諦めたマイは机の上にチヨコレートを置いて帰ろうとした。だが机の上にはすでに可愛らしくラシピングされた小袋があり、それを目にしたマイは首を傾げる。マイが机の上に視線を注いでいると軽いノックの音と共にコウの母親が姿を現した。

「起きない？」

お盆に乗せたカツプを机の上に置いたコウの母親は振り返りながらマイに尋ねる。マイが苦笑を返すとコウの母親はベッドに向かった。無言のまま、コウの母親は掛け布団に手を伸ばす。そして一気に、掛け布団を引き剥がしたのだった。

コウの母親は物腰が柔らかく、普段は淑やかな印象である。それが息子とはいえ手荒な扱いをすることに、マイは驚きを隠せなかつた。掛け布団に張り付いていたコウは床に転がり、呻き声を発しながら体を起こす。コウの母親は息子の様子には目もくれず、空のお盆をしてマイを振り返つた。

「ゆっくりしていいってね」

ただ頷くだけのマイに柔らかな笑みを向け、コウの母親は去つて行く。室内にはしばらく沈黙が流れていだが、やがてコウが寝起き丸出しの声を発した。

「何でいるんだ？」

コウは床に座り込んだ格好で掛け布団にくるまつており、眠そうな目でマイを見上げている。コウの家を訪れた理由を思い出したマイは机の上に置いた小袋を手にとつてコウの傍にしゃがみこんだ。

「あげる」

マイが小袋を差し出すとコウは床に寝転がりながら「置いといて

と並ぶ。色々な意味で呆れたマイは掛け布団の端を引っ張った。

「コウ、そんな所で寝ると風邪ひくよ」「みー」

「コウ、起きなつてば」「んー」

「……ん……」

「……寝ぼけてんの?」「つづ……」

「つづ……」

「起きろ!」「起きてる!」

マイが布団を引き剥がすとコウはようやく体を起こした。コウの母親が手荒になる理由を悔心したマイは深々と頷く。パジャマ姿のコウはベッドに背を預け、一、二、三度頭を振つてからマイを見上げた。

「……何でいるんだ?」「……その科白、一度曰だよ?」

夏はこんなに酷くなかったのにと、マイは嘆きながら同じ説明をくり返す。今度こそ状況を理解した様子で、コウは床に転がつている小袋を手にした。

「寝起きに甘いもの食べると頭がはつきりするらじこよ。今、食べるから?」「……」

冷やかに言い置き、マイは机の上に目を移した。そこにはコウの母親が運んできたカップが一つあり、一つをコウに渡したマイはもう一方のカップに口をつける。カップの中身はホットコーヒーだったが、すでに温くなっていた。

「それ、俺のカップ……」

コウが小声で抗議したのでマイはギョッとしてカップから顔を遠ざける。サッカーボールが描かれている白いカップから視線を移し、マイは決まりが悪く思いながら口唇を尖らせた。

「口つけてから言わないでよ。コウが寝ぼけてんのが悪いんじゃん」「まあ、いいけど……」

抗議はしたもののはねほど氣にしていないらしく、コウは袋を開けてチョコレートを口に放つた。糖分をとつたことで少しは頭が冴

えてきたのか、今度はコウが自ら話し出す。

「何でチョコレー？」

キヨトンとしているコウは本当に分かっていないようで、マイは呆れを通り越して言葉を失つた。眩暈がしたマイは頭を抱えながらコウの正面に腰を落ち着ける。

「あのね、コウ。今日は何月何日？」

「……忘れた」

「一月十五日！ あ、あれ？」

コウに言い聞かせようとしていたマイは自分が思惑と違つことを口走ったことに気付き、動転した。コウはマイペースにチョコレートを口に運び、それから不思議そつてマイを見る。

「何の日？」

「……バレンタインデーの次の日」

「ああ、バレンタインのチョコか」

コウは納得したように頷いたがマイには後味の悪さが残つた。マイが黙つているとコウはコーヒーを一口含み、口の中を空にしてから言葉を紡ぐ。

「これ、作ったの？」

「あ、うん。調理部の手伝いして、余り物もらつてきただけなんだけどね」

「ふうん」

「あ、そういうえば。あの机の上にある袋つて、もしかしてチョコレート？」

ふと思いついたマイが机の上を指すと、コウはあっさりと頷いて見せた。興味を引かれたマイは可愛らしへラップングされたチョコレートについて質問を続ける。

「誰にもらつたの？」

「松丸さん……だつたと思つ」

「松丸さん？ え、あの、松丸さん！？」

マイの知る限り、松丸という苗字の女子は同学年に一人しかいな

い。そしてその松丸といつ女の子は、非常に可愛いのである。

「ど、どんな子だった？髪の毛が茶色っぽい？」

マイが急いで問うとユウは思い出すよつこしながら頷いた。ユウの言つている『松丸さん』が間違になく学校でも一、一を争つ美少女だと確信したマイは思わず感嘆の息を吐く。

「……奇跡」

年中寝てばかりのユウが、誰が見ても可愛いと思える女の子からバレンタインデーにチョコレートをもらつ。これが奇跡以外の何なのかと、マイは感慨深く思つたのである。だが当の本人は怪訝そうな表情をしていた。

「奇跡？」

「そつかあ、ユウの良さを分かつてくれる人つているんだねえ。松丸さん、可愛いから。ユウ、きっと男子に羨ましがられるよ

「は？」

「えつ？」

ユウが女の子から告白されたと「う」とに感動すら覚えていたマイは、そこで会話がまったく成立していないことを察して眉根を寄せた。頭を爆発させているユウもまた、眉間に皺を刻んだままマイを見据えている。

「男子に羨ましがられるつて、何で？」

「えつ、だつて、松丸さんにチョコレートもらつたんでしょ？」

「もらつたけど、それが何で羨ましがられるんだ？」

ユウが不可解だという態度を崩さないのでマイはチョコレートをもらつた時の状況を詳しく聞いてみた。ユウの話によれば十四日の夜にたまたま家の近くで松丸に会い、知り合いだったので少し雑談をした上でチョコレートをもらつただけとのことであった。直接的な告白をされていないのでユウは理解していないようだが、バレンタインデーにたまたま家の近くで会つて、たまたまチョコレートをもらつなどという状況があるはずない。

（……鈍い。鈍すぎるよ、ユウ）

松丸の想いはマイの口から説明していいものではなかつたので、マイに出来ることはただ頭を振ることだけだった。

## バレンタインの奇跡？（3）

一月十六日、バレンタインマークも終わって落ち着きを取り戻した月曜日。その日の昼休み、マイは貴美子に呼び出されて人目につきにくい校舎の影にいた。朝香の話だらうと思つていたマイは、貴美子がその話題を切り出したので小さく息を吐く。

「ダメだったって。違う学校に彼女がいたらしいよ」

「そうだったんだ……。朝香、今日は部活も来ないかな？」

「うーん、今はそつとしておこしてあげよう。キミちゃんは？ 渡したの？」

マイが問うと貴美子は小さく首を振った。マイは返す言葉に困り、そつかあとだけ咳く。貴美子は弱つたような笑みを浮かべながら話題を変えた。

「あのね、マイちゃんこちよつと聞きたいことがあるの」

「うん？ 何？」

「小笠原くんの様子、こいつもと変わらない？」

貴美子とコウはお互いに顔くらいは知つてゐるというだけの関係であり、おそらく話をしたこともないだらう。そんな彼女が自分からコウの話題を持ち出したのは、これが初めてである。その理由にピンときたマイは答える代わりに問い合わせた。

「もしかして、キミちやんって松丸さんと仲いい？」

「あ、知ってるんだ？ 私が直接仲いいわけじゃないんだけど、松丸さんと仲がいいクラスの子に頼まれちゃって」

貴美子はすまなさそうにしながら事情を打ち明けた。マイは何だか複雑だなと思いながら苦笑する。

「松丸さんがコウにあげたチョコ、やっぱり本命だったんだ？」

「うん、そうみたい。でも小笠原くんがちゃんと分かつてくれたのかなって、松丸さんが心配してたんだって。マイちゃん、どう思つ？」

「松丸さんには言ひづらうこと思つけど……まったく伝わつてなかつたよ」

マイがユウの様子を伝えると貴美子はため息をついた。ユウの態度は思い出しながら説明しているだけでも呆れるものだったので、マイもつられて息を吐く。

「松丸さん、ユウのどこが良かつたんだろう」

「小笠原くんの寝顔が可愛いって言つてたらしによ」

「寝顔、かあ……」

ユウは一年中、授業中でもお構いなしに眠っている。そのため学校にいてもユウの寝顔を見ることが出来る機会はいくらでもあり、ましてユウと松丸は一年生の時に同じクラスだったのだ。松丸はおそらく隣の席になつた時にも見たのだろう、現在ユウの隣に座つているマイは漠然とそんな予想を立ててみた。

ユウの寝顔は子供のようで、確かに可愛いのである。そのことを知つているのが自分だけではなかつたと知つたマイは少し寂しさを感じていた。

（見てる人はちゃんと見てるもんだなあ）

それでも、ユウの寝顔に目を留めた人物が美少女だつたというあたり、やはりバレンタインの奇跡だつたのではないかとマイは思った。ユウの態度は素つ気なかつたが、それは松丸の真意が伝わつていないのである。彼女からちゃんとした告白をすれば、どう転ぶかはまだ未知数なのだ。

「松丸さんがユウと付き合いたいと思つてるんだつたらスパッと告白しないとダメだよ。遠まわしに言つても絶対伝わらないから」

松丸とは直接の友人ではないため深入りをする気はなかつたが、マイは一般的なアドバイスとして貴美子にそう助言した。マイの言葉を聞いた貴美子は少しだけ眉根を寄せた。

「バレンタインに家までチヨコあげに行つて、それでも伝わつてないつてすごいね。小笠原くんつて、やっぱり謎かも」

「……私もよく分からないや」

マイは夏に、少しだけコウの内面に踏み込むことに成功した。その時はコウのこと�이よく分かつたような気がしていたのだが、マイは今、再びコウのこと�이分からなくなってしまっていた。

(コウのこと分かったような気がしたなんて夢だったのかも)  
ちょっとだけコウのことを好きになる前の状態に戻ってしまったマイは朝香や貴美子と同じく、コウは謎だと呟きを零した。

## ホワイトマークの動機（1）

日曜日に春の気配が迫ってきて、この二月のある日曜日、倉科マイは母親に呼ばれて一階にある浴室を後にした。昼の時分、マイは昼食だらうと思つて階段を下りて行ったのだが、玄関先には来訪者の姿があった。

「あれ？ ユウちゃん」

靴を履いたまま玄関先に佇んでいたのはマイの家の隣の隣に住んでいる小笠原ユウという少年だった。ユウとマイは小学校三年生以来の付き合いで、現在はクラスメートでもある。

ユウは何よりも惰眠を貪ることを好むため、休日に姿を見かけることは滅多にない。希少な出来事に驚いたマイは止まっていた足を再び動かし、階段を下りきつた。玄関に辿り着いたマイと入れ替わるように、来客の対応に出て来ていた母親がニヤニヤ顔でリビングへと戻つて行く。母親の訝しい態度に首を傾げた後、マイは改めてユウを振り返つた。

「どうしたの？ ユウがうちに来るなんて珍しいね」

もしかすると珍しいどころの騒ぎではなく、ユウが自発的に訪ねて来たのはこれが初めてかも知れなかつた。あまりにも珍しい出来事だったので、真顔に戻つたマイはどんな事情があるのかと身構える。ユウの口から出てきた言葉は、別の意味でマイの想像を絶するものだつた。

「お菓子の作り方、教えてほしいんだけど」

「……は？」

意外すぎる申し出に、マイは啞然とした。

ものぐさなユウは普段から家事を一切しない。料理なんてもつての外であり、ユウの両親が留守にした時にはマイが食事を作り行つたほどである。そんな人物が料理（しかも菓子類）を作りたいと言いく出すなど、マイには想像もつかない珍事だつたのだ。

「ダメ？」

マイが明確な返事をしなかつたので、ユウが言葉を重ねてきた。  
なんとか驚きを治めたマイはユウが甘党であることを思い出し、何  
となく納得して頷く。

「いいよ。それで、何作りたいの？」

「クッキー」

「クッキーね。うん、いいんじゃない？」

物にもよるがクッキーは材料の種類が少なく、生クリームなどを  
使わないので比較的簡単に作ることが出来る。お菓子作りの入門に  
は最適だと思ったマイは細かなことは言わず、とりあえずユウに上  
がるよう指示を出した。階段を上り、一階にある自室へユウを招き  
入れた後、マイは本棚からお菓子類の本を数冊引き抜いてクッキー  
のページを開ける。

「型抜きとかアイスボックスとか色々あるけど、どれがいい？」

「……違いが分からない」

ユウは眉根を寄せ、床に広げられている本を見比べている。マイ  
はユウのために簡単な解説を加えた。

「アメリカンのブレーンはラング・ド・シャミティな食感になるよ。  
型抜きは見た目がキレイだよね。アイスボックスは市松模様とか、  
色々な模様が作れるの。絞り出しへ一番手間がかからないかな  
「ラングドシャ？」

「ああ、えっと、軽くて口の中で溶けるみたいな感じのやつ

「ふうん。色々あるんだな」

ユウは感心したように相槌を打つた後、再び本に見入った。しか  
し本を眺めているだけでは結論が出なかつたようで、ユウは再びマ  
イを仰ぐ。

「マイはどれが好き？」

「うーん、そうだな。食べる分にはアイスボックスが好きかな  
「じゃあ、それで」

ユウがあつさりと同調したので、マイはそれでいいのかと呆れた。

マイの視線には気が付かなかつたようで、コウは熱心に材料覧を眺めている。

「バターと砂糖と卵……一千円で足りるよな？」

「買い物があるかもしけないから、買い物物は確認してからの方がいいよ」

算段しているコウに言ひ置き、マイは台所へ行くべく立ち上がつた。するとコウが慌てた様子で制止の声を発したので、部屋を出ようとしていたマイは扉を背にして振り返る。

「何？」

「材料費は俺が出すから」

「へ？ 何で？」

「俺が頼んでるから」

「何言つてんの。無塩バターとかなんてお菓子作りでもしなきゃ使わないんだから。使い切らないともつたいないでしょ？」

「……まあ、確かに」

「足りない物だけ買えばいいんだよ。確認していくからコウせいかで待つてて」

主婦思考のマイに押し切られる形で、コウは渋々頷いた。コウを部屋に残して廊下へ出たマイは、今度こそ階下の台所へと向かう。リビングには母親がいて、マイが台所を漁り始めるとな審そうに声をかけてきた。

「何してるのよ、うるさこわね」

母親が台所まで出向いてきたので、マイは戸棚を探りながら事情を説明した。コウにお菓子作りを教えるのだと聞くとマイの母親は急に文句を収める。

「じゃあ、お母さんは買い物に行つてくれるから。五時までは台所空けてね」

ひどく好意的な母親の言葉を聞いたマイは眉根を寄せて顔を上げ、常々疑問に思つてこたことを尋ねてみた。

「お母さん、コウに甘くない？」

「だつてコウちゃん、素直でカワイイじゃない。同じ男の子でも秋雄とは大違い」

コウと比較されている秋雄はマイの兄である。大学生で一人暮らしをしてくる兄のことまでおき、マイは母親の言い分に呆れかえつた。

「はいはい。卵、使ってもいいですか？」

「いいわよ。買ってくるから」

母親から了承を得たマイは確認作業を終え、部屋に戻ることにした。リビングの扉を後ろ手に閉め、マイはため息を吐く。

(コウておばさんにもモテるんだ)

やつぱりコウのことはよく分からないと咳きながらマイは一階の自室に戻った。床に座つてお菓子の本を眺めていたコウが顔を上げたので、マイは確認の結果を伝える。

「三十個くらいだつたらうちはあるので足りんやつだよ。もつと数、いる?」

「いや、そのくらいでいい」

まだ材料費のことを気にしているのか、コウは渋い表情のままだつた。また細かいことを言こ出されないしつこと、マイはコウを促して部屋を出る。リビングへ行くとすでに母親の姿はなく、台所に立つたマイはさっそく器材を取り出した。

冷蔵庫から取り出したばかりのバターは硬かつたので、マイはコウに手の熱で柔らかくするよう指示を出した。ボウルの中のバターをコウが揉んでいる間に、マイは薄力粉や砂糖の準備をする。お互いの作業をしながら、マイとコウは雑談を始めた。

「コウさん、最近寝すぎじゃない?」

「……そうか?」

「そうだよ。この間のバレンタインの時だつてや、寝起き悪すぎ。

夏はそんなでもなかつたのに、何で?」

「冬は……無理。布団から出たくない」

「……まあ、その気持ちは分かるけど。あんまり寝てばっかになると

脳みそ溶けるよ？」

「溶けないって」

ユウは苦笑しながらバターが柔らかくなつた皿をマイに伝えた。

マイはボウルの中を覗き込み、ユウに次の指示を出す。

「手、洗つて。泡だて器で混ぜて」

ユウにそう告げた後、マイ自身は冷蔵庫から取り出してきた卵を割つた。卵の殻を使って卵白と卵黄とに分けていると、ユウが感心したような視線を向けてくる。

「器用だな」

「いいから、早くバターを混ぜる。そこに塩出しておいたから一つまみ加えてね」

「……はい」

マイに素っ気なく返されたユウは大人しく作業に戻り、バターをかき混ぜ始めた。バターがクリーム状になつたところでパウダーシュガーを加え、再び混ぜるという作業を幾度か繰り返し、卵黄と薄力粉を加えて混ぜ合わせれば生地の完成である。

「生地を袋に移して、こいつやって丸めて、冷蔵庫で少し硬くしたら後は焼くだけ」

生地を冷蔵庫に納めたマイはユウを振り返り、初めてのお菓子作りの感想を求めた。ユウは半笑いを浮かべ、小さく首を振る。

「手間がかかる」

「それが楽しいんじやん」

マイがきつぱりと言つて切ると、ユウは尊敬すると呟いた。

「そういえば、何で急にお菓子作りする気になつたの？」

マイが何気なく問いを口にするとユウは表情を改めた。どんな動機が語られるのかと、マイも真顔に戻つて身構える。しかしうが発した言葉は質問の答えではなかつた。

「やっぱり俺、金払う」

「……いいつて言つてんのに」

ユウが材料費の問題を蒸し返したのでマイは呆れていたが、やが

て妙案を思いついたのでポンと手を打った。

「それならコウ、ヨーグルト買ってきて。プレーンのやつね」

「ヨーグルト？」

「うん、ヨーグルト。クッキー代はそれでチャラ」

「……分かつた。行つてくる」

コウが素直に踵を返したので、マイも玄関先まで見送りに出る。戻つて来たらインターホンで知らせるこつをコウと確認しあつた後、マイは台所に戻つて卵白の泡立てを開始した。

## ホワイトティーの動機（2）

往復で二十分ほどかかる近所のスーパーへ買い出しに行つたユウは、マイの言つた通りプレーンのヨーグルト一つだけを手に戻つて来た。冷蔵庫のクッキー生地もほどよい頃合だったので、マイはさつそくユウに焼き方を伝授する。クッキーをオーブンにかけた後、マイはユウが買つてきたヨーグルトを開封した。

「そのまま食べるのか？」

ユウが不思議そうに尋ねてきたので、マイは卵白の入ったボウルを指し示す。

「クッキーには卵黄しかいらないから。卵白、捨てるのもつたいないでしょ？」

ユウはマイの言葉に頷きながらボウルを覗き込んだ。泡立てた卵白に砂糖とヨーグルトを加えて混ぜ合わせれば、作業は終了である。マイがボウル」と冷凍庫にしまつとユウが首をひねりながら疑問を口にした。

「それで、何が出来るんだ？」

「アイス……って言つよりシャーベットかな。食べたい？」

「食べたい」

「じゃ、明日食べにあいどよ。私が持つていつてもいいナビ

「明日？」

「凍るの、六時間くらいかかるから」

「……明日、食べに来る」

ユウが渋い表情で納得したのでマイは笑いながら頷いた。クッキーが焼きあがるまで再び時間が空いてしまつたので、マイはユウを促してリビングへと移動する。

「そういえばユウ、ご飯食べた？ 私、お皿まだなんだけど」

「微妙な時間に食べた」

「小腹、空いてる？」

「微妙。何か作ってくれるなら食べたいかも」

「はいはい」

ユウの微妙な返答にマイは肩を竦め、一人で台所へと戻った。夕食までそれほど間のない時間帯だったので、小さなおむすびを作る。熱い緑茶と一緒にリビングへ運び、マイはユウの隣に腰を下ろしておむすびにかじりついた。

「そういえばユウ、松丸さんから何か言われた?」

マイが話題にのぼらせた松丸とは、ユウのことを好きな女の子のことである。松丸はバレンタインデーにチョコレートを渡したのだが、ユウには彼女の真意がまったく伝わっていなかつた。人伝にそのことを聞いたマイは『ユウに気持ちを伝えるにはストレートに告白するしかない』という助言を間接的にしたのだ。マイはその結果が知りたかったのだが、ユウは話が通じていない様子で首を傾げる。「何かつて何?」

「……いや、何も言られてないならいいんじゃない?」

「何だよ、それ」

ユウは不可解そうな表情をしていたが、それ以上の追及はしてこなかつた。普通は気になつて問い合わせる場面だろうに、ユウにどうはどうでもいいことなのかもしれない。そう考えると松丸が不憫に思えて、マイは小さく肩を竦めてから緑茶を飲み干した。その後、片付けをしようと空いた皿に手を伸ばすと、ユウが行動を制してくれる。

「俺が持つてくから」

「そう? ジヤ、持つてきて」

ユウにリビングの片付けを任せ、マイは台所に移動した。先程焼きあがりを告げる音が鳴つたため、オープンは沈黙している。扉を開けると加熱されたバターの香りが台所に漂つた。

「うん。いい感じ」

クッキーがいい色合いに仕上がつていることを確認したマイは新しい皿を取り出して、そこにクッキングペーパーを敷いた。その上

にオープンから取り出したクッキーを並べていると、リビングからやつて来たコウが不思議そうに覗き込んでくる。

「これは何してんの？」

「余分な油を取つてんの」

「へえ」

「コウ、食べてみなよ。焼きたてだから美味しいよ」  
マイが何気なくクッキーを差し出すと、両手に湯呑みと皿を持つているコウは困った顔をした。マイはニヤリと笑い、コウの口元にクッキーを近づける。

「はい、あーん？」

「やめろよ。これ置いてから食べればいいだけだろ」

少し不機嫌な顔になつて、コウは流しに食器を置いてからクッキーが盛られた皿に手を伸ばした。行き場がなくなつてしまつたため、マイは手にしてこるクッキーを自分の口に放る。

「うん、上出来。美味しいよ、コウ」

「まあ、こんなもんだろ」

口では普通だと言いつつも、コウはまだなりでもない様子だった。ちぐはぐなコウの態度に笑いながら、マイは引き出しを開ける。

「持つて帰るんでしょ？ ラップでいい？」

「五個だけ包んで」

「え？ それだけ？」

「うん。残りは、マイに」

「……どういうこと？」

「今日は何日何日？」

唐突に日付を尋ねられたマイは、とっさに壁掛けのカレンダーを振り返つた。そして、日にした日付を無感動に読み上げる。

「三月十四日の日曜日……うん？」

「何の日？」

「……ホワイトデー」

ようやく納得がいったマイは途端に忙しない気持ちになつた。し

かしマイがソワソワしながら顔を傾けても、コウは真顔のままである。

「チヨコ、もらつたから。お返し」

コウがまったく表情を変えることなく言つてのけたので、笑いが堪えられなくなつたマイは吹き出した。

「うわー、ママだよ！ コウつてリチギだつたんだ」

「……マイの方がよっぽど律儀じやん」

「ええ？ 何で？」

「クリスマスにもケーキもらつたし」

顔を背けたコウはモゴモゴと、文句まがいの礼を言つた。マイはコウの態度に爆笑したが、ふと腑に落ちたことがあったので真顔に戻る。

「それで材料費のことこりだわつてたの？」

「お返しする相手におじりれるつて、意味わかんないじやん

「……確かに」

コウの意見に深く頷きながらも、マイはじわじわと嬉しさが沁みてくるのを感じていた。胸の中が微笑ましい気持ちで一杯になつたので、意味もなくコウの背中を叩いてみる。

「やっぱコウのことかなり好きかも」

「……は？」

「せつかくだから一緒に食べよ？ 紅茶淹れてくから先行つて」

コウは怪訝そうに眉根を寄せていたがマイは特に補足することはせず、クッキーの皿を持たせるとコウを台所から追い出した。マイ自身は紅茶を淹れてから、サラランラップを持ってリビングへと戻る。コウに言われた通り五個だけ取り分けて、それからマイは改めてクッキーの乗つた皿に手を伸ばした。

「それにしても、コウがホワイトデーを覚えてたなんてねー。ビッグクリだよ」「

マイがホワイトデーの話題を蒸し返すとコウは嫌そうな顔をしてそっぽを向いた。無性にコウをからかいたい気分のマイは、拗ねて

いるコウの頬を指でつつく。

「やめろつて」

マイの手を邪険に振り払うと、コウはソファーの上で移動してマイから距離をとった。もう少しコウで遊ぼうと思っていたマイはふと、あることに気がついてテーブルに視線を向ける。

「コウ、この五個つて松丸さんへのお返し?」

コウは不機嫌そうにしていたが、マイが真顔に戻ったので態度を改めた。コウが額いて見せたので、マイは嫌な予感を覚えながら問いを重ねる。

「もしかしてや、このまま渡そつとか思つてない……よね?」

「……ダメなのか?」

コウの返答が案の定なものだったので、マイは額に手を当てる頭を反らせた。

「あのねえ……お返しなんでしょ? だつたらちやんとラッピングして渡すこと!」

中身が手作りとはいえ、サラランラップのまま渡されたのでは相手も困るだろう。女心が分かっていないという以前に、コウには一般的な常識が欠けていた。今更ながらにそう思ったマイはため息を吐いてから立ち上がった。

「何かないか探してくるから。ちょっと待つて」

コウにそう言い残し、マイはリビングを出て一階の浴室に向かった。部屋を探つていると使いかけのラッピング用品を発見したので、マイはホッとして息を吐く。

(まったく……ラップのまま渡そつとするなんて何考えてんだか)  
もう一度深々と息を吐き、マイはラッピング用品を手に部屋を出た。しかし階段の手前で立ち止まり、マイはしげしげと手にした物を見つめる。

律儀にもバレンタインのお返しをしようと思ったコウは、松丸にまったく気がない訳ではないかも知れない。松丸の方は本気のようなので、コウにその氣があるのならばカップル誕生である。ホワ

イトニーのお返しをきっかけにユウが松丸と付き合い出すのかもしれないと思ふと、マイは少し複雑な気分になつたのだった。

## ホワイトティーの動機（3）

三月十五日、ホワイトティー翌日の月曜日。マイはこの日、隣の席に座っているユウがいつクッキーを渡しに行くのか気になって仕方がなかった。だが何事もなく昼休みが過ぎ、ついに放課後になつてもユウは松丸の元へ行く気配がない。初めはソワソワしていたマイも帰りのホームルームが終わつた頃には呆れついて、隣の席で眠りこけているユウの肩を揺さぶつた。

「ユウ、起きなよ」

マイが振り起こすとユウは鬱陶しいと言わんばかりに寝ぼけ眼を上げた。もう放課後だとマイが教えてやるとユウはようやく体を起こし、あぐびをしながら鞄に手をかける。本当に脳みそが溶けてしまつたのではないかと疑つたマイは、立ち上がりついたユウに声をかけて制した。

「ユウ、昨日のこと覚えてる？」

「昨日のこと？」

再び腰を落ち着けたユウが怪訝そうに言い返してきたので、マイはますます疑いを強めた。ユウの脳みそは本当に溶け出しているのかもしない。

「松丸さんにお返しあげに行くんでしょう？ ちゃんと覚えてる？」

松丸という女子は他のクラスでも人気が高いので、マイは声をひそめて言った。しかし可愛い女子に想いを寄せられているという自覚のないユウは平素と変わらない声音で応える。

「覚えてるけど、それが何？」

「いや、覚えてるならいいんだけど……。あんまりにも渡しに行く気配がないから忘れてるんじゃないかと思つて」

「……何でそんなに見てるんだよ」

ユウは呆れたような表情をしてマイから視線を外した。そこへ友人の朝香がやって来たので、マイも彼女の方へ視線を傾ける。

「マイ、久本くんが呼んでるよ」

朝香が教室の扉を指したのでマイはそちらに顔を向けた。久本は一年の時にマイと同じクラスだった男子である。扉の所でヒラヒラと手を振っているジャージー姿の久本を目にした刹那、マイはあることを思い出した。

「ああっ！」

思わず声を上げたマイは朝香に礼を言い、急いで席を立つ。しかし歩き出そうとすると、何かの力によってその場に引き止められた。スカートの裾を引っ張つてている手の主を見下ろし、マイは首を傾げる。

「何？」

「……なんだろ？」

奇妙な返答を寄せ越したユウは煮え切らない表情で手を離した。マイにもよく分からなかつたが久本を待たせているので、追及はせずにその場を後にする。

「ひつち来て」

小箱をしている久本はマイに手招きをしながら移動を開始した。一人がやつて来たのは階段の裏であり、ここは知る人ぞ知る密談に最適な場所である。すでに用件を察しているマイは期待のこもつた瞳で久本を見た。

「まさか本当にくれるとは思わなかつた。で、何くれんの？」

マイがせつづくと久本もニヤリと笑つて小箱を開ける。小箱の中には透明なビンが入つており、ビンの中にはレモン色の飴がたくさん入つっていた。ちなみにこれは『チョコレート一個分のお返し』である。

「一つ取つて、今すぐ食つて」

久本の挑戦的な科白にピンときたマイは、受けて立つと言い放ちながら飴を一つ取り出した。おそらくこれはロシアンルーレット式のゲームなのだろう。

「一個だけすくすくぱぱいとか、そういうやつでしょ？」

透明な包み紙を開き、マイは笑いながらレモン色の飴を口に放る。

当たるはずがないと高を括っていたマイは、飴が舌に触れた瞬間に吐き出した。

「辛い！！」

あまりの辛さに耐えられなかつたマイは水道まで猛ダッシュした。水道水で口内と喉を洗净した後、マイは再び階段裏へと駆け戻る。そこでは久本が、一人で爆笑していた。

「さすが倉科。お前ぜつたい、なんか持つてるつて」

「信じらんない！ レモン色はどう考えてもすっぱいんじやなきやおかしい！！」

「そこがミソなんだつて。期待を裏切らないお返しだつただろ？」

久本が笑いながら言うのでマイの堪忍袋の緒が切れた。

「もう絶対久本にはチヨコあげない！」

憤慨したマイはそう言い捨て、大股で歩き出した。人影もまばらな教室に戻つたマイは肩を怒らせたまま帰り支度を開始する。しかし朝香が声をかけてきたので、マイは怒りを静めてから顔を向けた。

「マイって久本くんと知り合いだつたの？」

「うん。一年のとき同じクラスだつたから。何で？」

朝香が微妙な表情をしていたのでマイは首を傾げて尋ねた。朝香は周囲を気にしつつ、マイの耳元に顔を寄せて答えを口にする。久本が友人である貴美子の想い人だと聞き、マイは驚きに目を見開いた。

「えー！？ そうだつたの！」

「マイ、声でかい」

「あ、ごめん」

朝香にたしなめられたマイは自分の口元を手で覆つた。人が少なくなっているとはいえ教室で他人の恋愛話することに気が引けたマイは、朝香を促して教室を後にする。先程久本と一緒に来た密談に最適な場所へと移動し、久本の姿がないことを確かめながら、マイは改めて朝香を振り返つた。

「久本くん、何の用だつたの？」

問い合わせてきた朝香の口調に若干の疑惑が感じられたので、マイは苦笑しながらあらましを説明する。一〇の階段裏でマイと久本の間に何があつたのかを知ると、朝香は苦笑いを浮かべた。

「そんなことがあつたんだ」

「レモン色なのに辛いんだよ？ 信じられない」

「アメの話はどうでもいいから」

朝香に飴の話題を素気なく流されたマイは不服に唇を尖らせた。しかし朝香の方には取り合ってくれるような様子はない。彼女の関心は今、久本のことが好きなのだと云う貴美子のことにのみ向けられているようだつた。

「久本くんつて彼女いるの？」

朝香が本題を口にしたので、真顔に戻つたマイは眉根を寄せながら天井を仰いだ。

「いないんじやないかな。 サッカー部が全員モテると思つのは単純だとか言つてたから」

「それ、彼女がいるかつてこととあんまり関係ないんじやない？」「私が会つた時はマネージャーからの義理チョコしかもらつてないつて言つてたよ。その後は知らないけど」

「バレンタインが休みだつたもんねえ……」

独白を零した朝香はふつと、遠い目をして顔を曇らせた。彼女がバレンタインデーに玉砕したことを知つてているマイは複雑な思いで口をつぐむ。しかし朝香は、すぐに笑つて見せた。

「ね、マイ。久本くんに彼女がいるか聞いてきてよ」

「えー、やだよ。校舎も違うし、わざわざ会いに行くのも変じゃん」「マイつて冷たい」

「……キミちゃんが知りたいくて言つなり、考える」

「……そうだね。本人のいないところで話を進めるのは良くないよね」

「うん、良くないよ」

貴美子の意向を尊重するということで朝香との話がまとまつたので、厄介なことにはならないで欲しいと思っていたマイはホッと息をつく。その後、悪ガキ然とした久本の顔を思い浮かべたマイは軽く眉根を寄せた。

「キミちゃん、久本のどこが良かつたんだろう？」

「頑張ってるところ、なんだって」

「……へえ」

すぐに朝香から疑問の答えを得たものの、反応を返し辛かったマイは曖昧な笑みを浮かべた。

## ホワイトナーの動機（4）

夕食を終えてリビングでテレビを見ていたら貴美子から電話がかってきたので、マイは携帯電話を片手に一階にある自室へと引き上げた。自室の扉を開ざした後はベッドに転がって、マイは通話を開始する。

『今、大丈夫?』

「うん、平気。朝香から何か聞いた?』

すでに用件を察していたマイは貴美子の聲音を窺いながら慎重に問い合わせた。貴美子からは肯定が返ってきたので、マイは小さく息を吐く。

「知らなかつたよ、キミちゃんの好きな人が久本だつたなんて」「私もマイちゃんが久本くんと知り合いだつて知らなかつたから。隠してたわけじゃないんだけど、言わなくてごめんね」

「つうん、気にしないで。それより、久本に彼女いるか確認する?」マイが单刀直入に尋ねると貴美子は黙つてしまつた。電話越しでも迷つているような氣配が感じられたので、マイの方から話を進めしていく。

「バレンタインの時も迷つてたみたいだけど、告白とか考えてたりしないの?』

『久本くん、部活忙しそうだし。それに、もうすぐ三年生になるでしょ? 言つチヤンス逃しちやつたかなつて思つてる』

貴美子の返事を聞き、マイの頭には受験の一文字がチラついた。加えて運動部に所属する者にとって三年生の夏は、中学生活最後の大会があるので、確かに、恋愛をしている暇はないかも知れない。「だったらさ、やつぱり久本に彼女いるか聞いてくるよ。こんなこと言つのもアレだけど、もし彼女いたらキミちゃんも諦めつくかもしれないし」

『……そうだね。じゃあ、お願ひしようかな』

「うん、わかった」

貴美子に頷き返しながらマイは体を起こした。インター ホンが鳴り、階下から母親の呼ぶ声が聞こえてきたからである。

「「めん、誰か来たみたい」

『あ、うん。じゃあ、また学校で』

「うん、またね」

通話を打ち切ったマイは携帯電話をベッドに放り投げ、自室を出て階下に向かった。階段を下りて廊下の途中でコウの姿を目にしたマイは驚きながら傍へ寄る。

「どうしたの？」「こんな時間に」

マイが問うとコウは不服そうな表情で答えた。

「アイス、食わせてくれるって言つたじやん」

「あ、忘れてた」

貴美子のことで頭が一杯だったマイはコウとの約束を完全に忘れていた。侘びを入れてもコウはまだ不満そうにしていたが、マイは文句を言われないうちに上上がるよう促す。先に一階へ行っているようコウに言い置いてから、マイはシャーベットを取りに台所へと向かつた。

「上にコウがいるから。これ食べさせたら帰す」

時刻が八時を回っていたので、マイは一応、リビングにいる母親に断りを入れた。母親はマイが手にしているシャーベットを一瞥した後、小言を言つどころか笑みを浮かべて見せる。

「そんなに急かしたらコウちゃんが可哀想でしょ？ ゆっくりしていけばいいのよ」

「……あのね、明日も学校だから」

相手がコウだと途端に甘くなる母親を軽くねめつけ、マイはリビングを後にした。自室へ戻つてコウにシャーベットの盛られた皿を渡し、マイはベッドに腰を下ろす。まだアイスを楽しむには寒い時期だったので、マイは暖房のスイッチを入れてから改めてコウを見た。

「松丸さん、喜んでくれた？」

マイにとつては自然な流れで口を突いて出た言葉だったのだが、ユウはふっと顔を曇らせる。ユウがそうした表情を見ることは珍しく、マイは驚いた。

（な、何かあつたのかな？）

そうは思ったものの、ユウからは質問を拒絶するオーラが発せられていたため、マイは仕方なく沈黙を保つ。会話が途絶え、室内にはシャーベットを崩すシャリシャリという音だけが小さく響いていた。

（うわあ……何、この空氣）

自分の部屋にいるのにどうして気詰まりを覚えなければならないのかと、マイは渋い表情をした。沈黙に耐えられなかつたマイが別の話題を探していると、ユウが不意に口火を切る。

「久本と仲良かつたんだ？」

ユウが唐突に妙なことを言い出したので、マイは首を傾げながら話に応じた。

「そんなんに仲が良いつてわけじゃないよ？」

「でも、何かもらつたんじゃないの？」

「そう！　聞いてよ！」

ユウの一言で久本の仕打ちを思い出したマイは憤慨した。マイが突然声を張り上げたのでユウはビックリしたように目を瞬かせる。しかしマイはユウの様子などお構いなしに久本から受けた嫌がらせの内容を切々と語つた。ユウはポカンとしながら聞いていたが、マイの話が一段落したところで眉根を寄せて言葉を紡ぐ。

「アメ、どのくらいあつたんだ？」

「うーん、二十個くらいはあつたかな？」

「……運、悪すぎ」

呴いた後、ユウは笑い出した。それまでの気まずい空気が払拭されたので、マイは「まあいいか」と思いながら苦笑する。だが微妙な違和感を覚え、マイはユウに話しかけた。

「ユウは久本のこと知つてたの？」

「うん。一年の時、久本に勧誘されてたから」「は？ ユウをサッカー部に、つてこと？」

「そう」

ユウは何でもないことのように頷いたが、彼がサッカーをしている場面をどうしても想像出来なかつたマイは吹き出した。

「うわー、似合わない。ユウが運動してる姿なんて想像つかないよ」「週二回、体育でやつてるから」

「もしかして、ユウって運動神経いいの？」

「さあ？」

「よし、次の体育の時はユウを見てよう

「……やめろよ」

心底嫌そうな顔をして、ユウは身を引いた。いつの間にかユウの態度がいつも通りになつていていたので、マイは内心で安堵する。（あつちもこつちも明るくないなあ）

人知れずため息をついたマイはそう思つると同時に、周囲がバレンタインデー やホワイトデーで盛り上がりしているのに一人だけ取り残されていることに若干の寂しさを感じて小さく肩を竦めた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8185m/>

---

Loose Knot

2011年3月23日15時10分発行